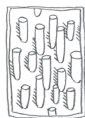


映画「PERFECT DAYS」



ヴィム・ヴェンダース監督、役所広司主演による映画。

公衆トイレの清掃員として働く主人公の生活が淡々と描かれていく。朝起きて歯を磨いて鉢植えに霧を吹いて駐車場前の自動販売機で缶コーヒを買って仕事に行って、帰ってきたら銭湯に行って地下街の居酒屋で夕食をとって本を読みながら寝るという、判で押したような日常がくり返される。いつもと違う事が起こったと思ったら、それは彼の休日であって、そしてそれもまた休日ごとに判で押したように同じことがくり返される。それにもかかわらず彼は実は生き生きと生活し、日常の小さいことを興味深く観察していく。それはおそらく（この映画の後半に起こる「事件」から想像できるように）主人公自身がこの人生を自分で選択したという自負に拠るものだと私は思う。

私としては、何も事件が起きずにこの平凡な日常が延々とくり返される映画であればもっと興味深かったらと思うが、それでは映画興行としては成立しなかつただろうな。

（才野 洋）

「THE 新版画 版元・渡辺庄三郎の挑戦」

（2024年1月26日～3月18日 高根県立美術館）



今また流行ると噂の「新版画」が、隣県に来てみると友だちから聞いた。絵画には詳しくないが、絵を見るのは好きだ。新版画とは明治末から昭和の初めにかけてブームとなった浮世絵木版画。浮世絵に、遠近法、光や影の表現など洋画の技法を取り入れ、彫師・摺師と協同して新しい表現を模索したものだという。

例えば川瀬巴水（かわせはすい）《東京二十景 芝増上寺》。着物の裾が翻る中央の女性は、傘を窄めて風雪から身を守ろうとしている。大きな松の幹や枝葉を撓める雪。これらの構図は浮世絵で見たことがあるようだ。しかし、空は上方が暗く下方がやや明るむ。背景に淡く描かれた木は存在感が薄く輪郭がない。三解脱門の赤は、庇の影になる部分が暗めに表現されている。空中の雪は粒の大きさも位置もまちまちで、風に煽られて舞っているように見える。ばれんの跡が弧を描いて、嵐の様子をさらに表現する。従来の表現に、観察による表現を加え、新たなテクニクを取り入れて、どう見えるかが特に意識されていると感じた。（中村 恵）